

研究

## 佐賀藩蘭学寮・医学寮の創設及び変遷の再検討

西留いずみ

## はじめに

佐賀藩は天保元（一八三〇）年に就任した一〇代藩主鍋島直正の個性・志向、福岡藩と交替で務めた長崎警備の重責などから近世後期、他藩に抜きんでて蘭学が盛んであった。杉本勲氏は「佐賀藩の蘭学は他藩と比べて医学から軍事科学への転換が、比較的早期にしかもきわだって行われたところに大きな特徴がある」と述べている<sup>①</sup>。蘭学の始まりが医学であったことは確かだが、近世後期の佐賀藩に於いては医学寮以外に蘭学寮、火術方、精煉方などがその興隆の拠点となっていた。天保期以降、これら蘭学的知識を不可欠とした役局が多数設置され、そのまま存続することなく統合、移転、編入、廃止を繰り返しているが史料の制約もあり、全体像が不明確な状況にあった。近年、中野正裕氏が「幕末佐賀藩科学技術系役局の変遷」<sup>②</sup>でそれらの役局を「科学技術系役局」として総合的に捉え、図表を提示しつつこれまで整理されてこなかったその変遷を詳説した。

その成果の一方で、蘭学寮の創設時期が一次史料に基づいた典拠がない通説のままとなっている状況がある。佐賀藩の蘭学寮創設時期は『鍋島直正公伝』（以下『公伝』と記す）の記述を元に嘉永四（一八五二）年とされてきたが、生馬寛信氏は佐賀藩の大配分である白石鍋島家の記録類から蘭

学寮の創設が天保一一（一八四〇）年であることを指摘した<sup>④</sup>。但し、生馬氏の研究が教育史からの立場であったこともあり、蘭学史や科学史・医学史研究者の目につかず、看過されてきた。管見では蘭学寮の創設時期を嘉永四（一八五二）年としているのは『公伝』のみだが、一次史料は示されていない。『公伝』は大正九（一九二〇）年に大隈重信監修、久米邦武編述、中野禮四郎増補・校訂として編まれた書で、久米邦武の手による一〇代藩主鍋島直正の伝記と言ってよい<sup>⑤</sup>。佐賀藩の蘭学研究では『公伝』が典拠とされる場合がままあるが、同書ではほとんど二元となる史料が明示されない。伊藤昭弘氏は一次史料が示されない『公伝』を典拠とする危うさについて「（前略）典拠がはっきりしない話を前提に、研究をすすめることがあつてはならない。この点についてこれまで誰も問題にしてこなかったことが、筆者にとつては大きな驚きである。（後略）」と指摘している。生馬氏も「これまでの佐賀藩教育史研究は概ね後世の編纂物に依拠し、藩制の日記・記録、有力家臣の記録、学校の記録など、一次資料ないしそれに近い史・資料を使用することは少なかった」と述べている。筆者も全く同感である<sup>⑧</sup>。佐賀藩蘭学史の基礎的研究にはまず史料発掘に努力し、新しい史料を典拠として周知とされている見方に修正を加え、正確な史実を開示することが重要であると考えている。

今回、筆者は佐賀藩蘭学者金武良哲の日記等<sup>⑨</sup>を精査する中で生馬氏が典

拠とした白石鍋島家の史料以外にも蘭学寮創設が嘉永四（一八五二）年以前であったことを裏付ける史料を見出した。本稿では従来の佐賀藩蘭学史研究で顧みられてこなかった生馬氏の指摘について、新出史料も加えて再確認するとともに、蘭学寮創設時期が天保年間であった場合の意義を検討したい。

## 一 医学寮の変遷

蘭学寮創設時期について検討を加える前に関係の深い医学寮の変遷について時系列でみてみる。尚、佐賀藩の医学寮については「医学館」、「医学寮」、それぞれの表記が交錯しているが本稿では史料とその要約以外では基本的に「医学寮」に統一する<sup>10)</sup>。

医学寮に関する管見で最も古い記述は文化三（一八〇六）年、弘道館教授に任命された古賀穀堂が「学館教育が「学政」・「藩政」の根幹である」ことと「人材登庸・人材育成が政治の根本である」ことを説いて九代藩主鍋島斉直に提出した意見書『学政管見』<sup>11)</sup>であろう。その中で穀堂が医学寮建設を説いている部分を左に抜き出してみる。

### 【史料一】

（前略）医学館ノ義、急ニ御トリ立モ相叶レサル事モアルベシ、御家中医者大抵六十人計ノ由ナレハ、右ノ人数ニテハ医学館出席致スコトモ、老医ナト日夜ヒマナキモノ多レハ、大惣ノ出席人モアルマシ、諸陪臣ノ医・町医・郷医ナト、ヨホト沢山ナレトモ、コレ又家業方イソガシキナト、テ、一時ニ集ル事モアルマシ、シカレハマツ学館ノ内ニ

医学館ヲ持込ニシテソノ稽古寮ヲ立、上手ノ医者ニ命セラレテ医学寮ノ教授トシテ、御家中若手ノ医者ハ不残コノ処へ出席稽古致スベシ<sup>12)</sup>

要約すると医学館を急に創設することは難しいのでまず弘道館内に医学館を持ちこみ、上手の医者を教授として稽古寮を建て若手の医者はそこに出席すればよいということである。当時はまだ九代藩主斉直の時代で、穀堂のこの意見書はすぐさま採用されるといふ状況にはなかった。当時の医学寮を巡る状況について幕末期の佐賀藩蘭学者相良知安の回顧録、『相良知安翁懐旧譚』の中で相良が左のように述べている。

### 【史料二】

従四位少将鍋島治茂公の代に成つて、同公が文学を好まれる所より、大に同藩の文化を進めるつもりで、先づ弘道館を建て（ママ）、次で医学寮を起すの計画であつたが、サテ第一資金の定格がない、即ち予算の出所に困つたので、之れを時の侍医牧仲禮に詢られた、所が牧は、自分等が勤務の余暇で医学寮の教鞭を採るは困難である、又第一資金が不足で致し方がない、故にこれは外様の有力なる壮年に托し、その一定の資金を與へて専ら其の人に当らしめるが良策だとの意見で、終に其門人古賀健道を推挙した。（中略）此の古賀健道といふ人は、号を朝陽といふた人で、当時学力拔群と称せられ且つ資産も富有であつたから、右の牧の推挙と共に奮つて其の任に当り、直に医学館を起して陽（賜カ。以下賜を使用・筆者註）金堂と名けた（後略）<sup>13)</sup>

要約すると鍋島治茂公（八代藩主・筆者註）の代になって藩の文化をすすめる目的でまず弘道館を建て、次に医学校を起こす計画であったが資金がなく、侍医の牧仲禮に諮ったところ外様の有力者に一定の資金を与えさせるのが良策とのことで古賀健道を推挙した、その結果、古賀健道が医学館を興し賜金堂と名付けたと言うことである。古賀健道は朝陽、仲庵、安道とも呼ばれる佐賀藩医<sup>14</sup>であるが、本稿では史料以外では以下古賀朝陽で統一する。回顧録の記述によると古賀朝陽が建てた医学校は賜金堂と呼ばれ「当時知名の文人墨客、頼山陽や谷文晁などが時々佐賀に来ることがありと、皆右の賜金堂に滞在して居た（後略）」<sup>15</sup>との記述もある。

この古賀朝陽の医学校、賜金堂に藩から多少の資金供与が実際にあったかは不明だが、いわゆる私的な塾のようなものであったと考えられる。天保五（一八三四）年に創設された藩立の医学寮とは趣を異にする。この賜金堂の場所は地図上で言うところ八幡小路南一四番で『明和八年・佐賀城下屋鋪御帳扣』（以下『屋鋪御帳扣』と呼ぶ）の記述を左にあげてみる。

### 【史料三】

（前略）右成富千兵衛与馬渡高雲居屋敷を、生野圖書組古賀仲庵江売渡、如願相済、文化六年巳七月、新沽券状買主江渡 右古賀仲安今般牢人被仰付候付、文政貳年卯八月二日、居屋敷御取揚二相成右牢人古賀仲安揚屋敷を、孫六郎組高木権兵衛江拝領買、如願相済、文政貳年十二月（九月）、沽券状当主権兵衛へ渡ル 右鍋島孫六郎組居屋鋪を被御買揚、執行玄番組古賀安道江被為拝領候二付、文政六年未九月、新沽券状当主へ渡ル

右元医学寮隼人組大石良英江被為拝領二付、安政五年午十二月、新沽

### 券状当主江渡ル<sup>16</sup>

順を追ってこの記述をみていくと、まず文化六（一八〇九）年に馬渡高運の屋敷を古賀朝陽に売り渡した。そこから判断すると賜金堂が建てられたのは古賀朝陽が地所を買った文化六（一八〇九）年以降である。頼山陽が文政元（一八一八）年五月に佐賀を訪れ、古賀朝陽の賜金堂で弘道館の諸儒たちと会飲したとその日記に書いているので文政元（一八一八）年の時点で存続していたことも確かである。次に文政二（一八一九）年に古賀朝陽が浪人しその地所が取り上げられたとの記述があり、朝陽の失脚により賜金堂は終焉を迎えたと推測される。その後文政六（一八二三）年に古賀朝陽は復権し同地所を拝領、再び朝陽のものになるが『屋鋪御帳扣』ではそれ以降の使途は不明、次は間があいて安政五（一八五八）年に「元医学寮」を大石良英が拝領したという記述である。この「元医学寮」というのは『公伝』で嘉永四（一八五二）年にこの場所に建てられたと言われる医学寮と蘭学寮であると考えられるが時期等について明確な記載はない。一方、実質的な意味での藩立医学寮は天保五（一八三四）年、この八幡小路の古賀朝陽居宅の向い側に設立されている。『公伝』の天保五（一八三四）年部分には

### 【史料四】

七月十六日医学館を設立せんと、両城付の侍医中より人選して其教職を兼ねしめ、弘道館の教授にも其係を命ぜらるゝものあり。先づ試みのために其資料として米十石を出し、医学館の校舎を八幡小路（後の水町昌庵の宅）に設けらる<sup>18</sup>

とある。後の水町昌庵の宅とのことで『屋鋪御帳扣』を確認するとその所在地は八幡小路の北一七番で確かにかつての古賀朝陽宅（賜金堂）の向い側である。同地所の記述には

【史料五】

（前略）右北使者屋御用地、大庭仲頭江拜借被仰付置候処、今般町方役所二相建度旨、請役所今被申達候付、其段達御耳、寛政一二年未正月、御引渡二相成候事

右元町方屋敷を、李之助組水町昌庵拜領買、願之通相濟、弘化二年巳十二月、新沽券状当主昌庵江渡ル<sup>19</sup>

とある。寛政一一（一七九九）年、大庭仲頭が拜領していた同地所が町方屋敷になっており、その後弘化二（一八四五）年に水町昌庵が拜領買いしとということである。『相良知安翁懷旧譚』には賜金堂の対面に古賀朝陽が私財を投じて医学寮のために地所を差し出したとあるが、『屋鋪御帳扣』の記述を見る限りでは対面に当たるこの北一七番に朝陽が私財を投じた形跡も医学寮がその地にあったということも確認できない。

この天保五（一八三四）年創設の藩立医学学校について『直正公年譜地取』を確認すると天保五（一八三四）年七月一六日条に以下の記述がある。

【史料六】

同（天保五年七月・筆者註）十六日、請役所今

御家中其他医学之儀、打追之通二而は熟達之者出来兼候二付、医学寮被相建、一際相励候通有御座度、其通於○仰付は、先年古賀健道儀医

学取立二付而、居屋敷拜領買をも被仰付置、相応之場所二付、右宅へ学寮被相建、取立之儀は両御丸御医師今兼帯、偕又学業習熟無之而不相叶二付、学館教職今も懸合被仰付、左候而御遣料等何程被差出被下度旨、御医師中より奉願候段御側今相達候、依之遂吟味候処、医業之儀御領内人民御救専一之儀候処、良医寡候而は療治不行届、総テ、泰國院様御代以来医業興隆之儀、段々厚被仰出之次第有之候処、打追之姿二而は御趣意今も相叶間敷、彼是を以は、相達之通医学寮被相立、御遣料之儀は一先為御試米拾石被差出方二可有御座、於然は御勸之詮一際相立、一統相励可申、尤取立之儀両御丸御医師之内、左之者共兼帯被仰付、将又学館教職今も左之兩人懸合被仰付方二可有御座哉と旁吟味仕候、此段奉伺候

但、御医師名前其外略之<sup>21</sup>

大意は医学については現状のままでは熟達者が出ないため医学寮を建てること、医業は領内人民のためであり、八代藩主鍋島治茂の時代からその興隆について命じられているが実現していない、とりあえず一〇石の遣料で西の丸と本丸の医師を兼帯として弘道館の教職も関わって運営するということである。前述の『相良知安翁懷旧譚』にも鍋島治茂公の代から医学寮を興す計画があった旨の記述がある。<sup>22</sup>しかし、この医学寮は設立されたものの漢方主流の時勢にあつて鳴かず飛ばずの状態であつたようで『公伝』には

【史料七】

医学は數多の科に分かれたるを以て、教職のみ多きを要して徒弟の来

り学ぶは少なく、旁々授業の実益を挙ぐることに難くして費用のみを要するにより、只試みに建てたるまでにて、さしたる発展を見ることなくして経過したり<sup>23)</sup>

との記述が見える。前年の天保四（一八三三）年の古賀穀堂の日記、五月七日程にも「成就院文会、島本良順為主、談西洋社中委（萎）茶無至者、因嘆土俗衰颯、絶無意氣、不若且止<sup>24)</sup>」と書かれ、蘭学社中の低迷を嘆いていることがわかる。更に『公伝』には

#### 【史料八】

元来佐賀の侍には好学の志鈍きもの多かりしを以て、西洋学に指を染むるもの乏しきも亦怪しむに足らざる現象なれど、唯想到すべきは、元年高橋作左衛門の獄決して、其連累の罪科に処せられたる以来、幕府間には蘭学者を目して売国奴と為し、之を憎嫉すること甚だしかりし事にて、其壓迫の影響は自然佐嘉にも及びて、蘭学の衰へたるにてもあるべし。<sup>25)</sup>

の記述もある。つまり、シーボルト事件の影響もあって天保初期には医学としての蘭学も佐賀藩に於いては低調であったと考えられる。しかし、江戸表では天保二（一八三一）年一二月に伊東玄朴が召し出され一代侍として七人扶持を賜っているため、藩主直正は天保初期でも蘭学に信を置いており、国許に限って低調であったと言った方が正確であろう。

『草場珮川日記』の天保九（一八三八）年三月九日条に「医学寮詩会<sup>27)</sup>と見えるので天保五（一八三四）年創設の藩立医学寮はその時点では同所に

そのままあったことが確認できる。草場珮川は多久領の著名な儒学者でその学識を買われ藩主直正が直接、請役であり弘道館の頭取でもあった鍋島安房に命じて弘道館に雇い入れた人物である<sup>28)</sup>。他方、鍵山栄氏は『佐賀の蘭学者たち』で「その後、医学館はあまり振るわず、天保一〇年（一八三九）廃止された<sup>29)</sup>」と述べているが管見では典拠を見つけない。後に医学寮は天保一一（一八四〇）年六月、当時改築された弘道館の中に新たに設置される。この弘道館改築に伴う医学寮の移設については管見では唯一、中野正裕氏が佐賀藩の科学技術系役局の変遷について述べる中で言及している<sup>30)</sup>のみで研究史上、ほぼ看過されてきている。この弘道館改築とそれに伴う医学寮移設をうかがわせる史料をここで確認し検討したい。『直正公年譜地取』の天保一一（一八四〇）年四月二五日条である。

#### 【史料九】

一（天保一一年四月・筆者註）同廿五日、今度学館御改築二付、安房  
分瓦壱万枚献上仕度旨、扱又主水分五千枚、志摩分三千枚追々同  
断

但、医学寮御取結御建方相成候二付、松隈甫菴其外分献金仕  
候<sup>31)</sup>

天保一一（一八四〇）年四月二五日には学館が改築されるとのこと。鍋島安房はじめ鍋島主水、鍋島志摩が瓦を献上する旨書かれた後、医学寮が「御取結御建方相成候」とあり、続けて「松隈甫菴其外分献金仕候」と藩医であった松隈甫庵その他から献金があった旨も記されているので、弘道館が改築されるのを機にその中に医学寮も取り結ばれて建てられた、つまり

弘道館の中に併設され、藩医たちも献金したと解釈できるのではないか。

『直正公譜』の天保一一（一八四〇）年六月二三日条には以下のような記述がある。

【史料一〇】

新学館開講二付、御格式二而御成

但、弘道館之儀、泰國院様（八代鍋島治茂）御代、松原小路へ被相  
 建置候処、去年御改築被仰出、北御堀端被相移、講堂其外諸局・内  
 外寮、且武芸場等迄夫々相備、一体之規模以前分は数倍御取扱被相  
 整、右二付而ハ三御丸御家御解崩被相用、扱亦鍋島安房其外分瓦式  
 万枚程献上、御家中少壮之向は土砂・木石等相運、当夏御成就相成  
 候二付、本文之通御成有之候末、追々左之御書付当役へ被相渡<sup>22</sup>

要約すると天保一一（一八四〇）年六月二三日に松原小路にあった藩校  
 弘道館を北御堀端へ移築しその結果、講堂・その他諸局・内外寮・武芸場  
 なども備わり、以前より非常に広い敷地となり規模が数倍になった、請役  
 である鍋島安房その他も瓦を二万枚献上するなどしてこの夏に出来上がっ  
 たということである。史料九も合わせ考えると、規模が数倍になった敷地  
 に医学寮も場所を与えられたと筆者は推察する。

医学寮弘道館内移転説のもう一つの根拠として弘道館教諭で儒学者の草  
 場珮川の嫡子である草場船山の日記から天保一一（一八四〇）年二月の記  
 述をあげてみる。

【史料一一】

『草場船山日記』 天保十一年二月（もしくは三月・筆者註）

上 ■■■（本文ママ・筆者註） 得家君移転医学館之報<sup>23</sup>

この記述は日付が明確でないが日記のひとつ前が二月二九日であるので  
 二月末、もしくは三月初旬の記述である可能性が高い。要約すると父珮川  
 （家君）から医学館に転居したと船山のもとに知らせがあったということ  
 である。父珮川の『草場珮川日記』の年表にも天保一一（一八四〇）年二  
 月に「珮川、医学館に寓居を移す」と書かれており、史料一がその典拠<sup>24</sup>  
 と考えられる。珮川は天保六（一八三五）年に弘道館教諭、天保八（一八  
 三七）年には教諭を命じられて本藩出仕となって多久から佐賀に移ってい  
 る。その際、息子船山が多久の禄を継承した。<sup>25</sup> 珮川が佐賀に移った当初の  
 居住地は不明であるが天保八（一八三七）年一月二三日には前年に他界  
 した盟友古賀穀堂の佐賀城下精町の家に転居し一枝巢居と号している。<sup>26</sup> 天  
 保一一（一八四〇）年の二月になって藩の取計があつたのであろう、八  
 幡小路の医学寮に寓居するようになったと解釈できる。弘道館は天保一一  
 （一八四〇）年六月に拡張改装されて開講している。四か月先の移転を見  
 据えて、八幡小路の医学寮は既に閉鎖されていたか、もしくは鍵山栄氏の  
 言及どおり天保一〇（一八三九）年に廃止され、既に医学寮跡地になって  
 いた可能性もある。珮川の嫡子船山の『草場船山日記』には翌天保一二  
 （一八四一）年一月二日に「達家君八万（ママ・筆者註）巷之居<sup>27</sup>」、二月二  
 日には「初更達八幡巷<sup>28</sup>」という記述が見られ、当時八幡小路の医学寮が  
 あつた場所に珮川が居住していたことは確かであり、その時点で医学寮は  
 もはやかつての場所になつたことは明らかである。

その後、珮川は弘化二（一八四五）年六月二日に城下馬賣馬場に転居している<sup>(39)</sup>。珮川が居住していた医学寮の跡地、八幡小路北一七番の地所は弘化二（一八四五）年一二月に水町昌庵が拝領買っている<sup>(40)</sup>ので当然弘化二（一八四五）年にも医学寮はそこにない。

この天保一一（一八四〇）年の弘道館拡張以降、佐賀藩の蘭方医学は活気づいたと言つてよい。江戸では天保一四（一八四三）年、伊東玄朴が藩主直正の江戸詰御側医となっている<sup>(41)</sup>。弘化三（一八四六）年に天然痘が大流行し、それをきっかけに嘉永二（一八四九）年六月に痘瘡の予防法として痘苗を輸入、橋本宗建が自身の子ども等に接種し種痘が導入された<sup>(42)</sup>。藩医大石良英が藩主直正の嫡子淳一郎（後の直大）に痘苗を植え善感した<sup>(43)</sup>。この藩主が率先して痘苗を自分の子どもたちに植えさせたことで種痘は藩内で受け入れられ、嘉永二（一八四九）年引痘方が設置され御側医を引痘方医師に任命した<sup>(44)</sup>。青木歳幸氏は「種痘の成功は、西洋医学修業の機運を高め、庶民の西洋学術に対する有用性を認識させた」と述べている<sup>(45)</sup>。

弘道館内への移転の後、医学寮は八幡小路の天保五（一八三四）年創設の医学寮の向い側に移されたと考えられる。『公伝』ではその移設について

#### 【史料一二】

かくて此新法（文武課業法・筆者註）に繼いで医学校と蘭学校とを新設せらるゝに至りたり。当時八幡小路の元医学校の向ひに、数寄に任せて建築し、夏には紗の戸障を用ゐて蚊帳を廃する用意をなし、表の長屋は之を家塾にしつらへたりし古賀朝陽の旧宅ありて、武富圯南借居、門生を教へゐたりしかば、これを買収して医学校となし大石良英

を居住せしめて、本宅にて医学を授けしめ、塾舎を蘭学寮となし、大庭雪齋を教導となし、須古の医士洪谷良次（緒方洪庵の門に学びて原著を読むに有力なる新進なり）を指南役となし、永松玄洋、宮田魯齋等に掛合を命ぜられたり、是を佐嘉に蘭学寮を設くる始めとす<sup>(46)</sup>。

と蘭学寮の創始と合わせて説明されているが明確な史料は示されていない。

嘉永四（一八五二）年に医学寮と蘭学寮が古賀朝陽旧宅である八幡小路南一四番に新設されたことを示す史料は管見では見当たらず、『公伝』のみが通説の典拠であり、明確な事実とは認識し難いのであるが、医学寮については『相良知安翁懷旧譚』に左の記述がある。

#### 【史料一三】

嘉永四辛亥歳、前に云ふた医師世禄半減の議が実行されて、総計千石を削り出され、茲に再び医学館を復興したのであった（中略）かくして再興された医学館は、漢方蘭方の侍医を以て教官とし、種痘をも行ひ、且つ試験もこゝで行はれて、開業免札を渡すといふ工合であった<sup>(47)</sup>

これを見ると医学寮については場所の記載はないが嘉永四（一八五二）年に再興されたであろうことはわかる。

一方、『草場珮川日記』の嘉永七（一八五四）年閏七月十日条には左の記述がある。

## 【史料一四】

一、上校、書経発会、○医学寮免札渡ニ赴候へ共、相濟候故途中引返  
し、○武(船山)邸、○夜廉来<sup>84)</sup>

弘道館に行った後、医学寮へ免札を渡しに行ったが済んでいたので引き返したとのことで、当時弘道館と医学寮が別な場所へあったことを示唆している。史料一三とも考え合わせると嘉永四(一八五二)年、八幡小路の南一四番に医学寮が再興されたことは蓋然性が高い。但し、蘭学寮がそこに初めて併設されたという典拠はやはりないということは指摘しておきたい。これ以降も『草場珮川日記』には医学寮の記事が続く。左にその部分を抜き出すと

嘉永七年八月二二日 今晚於医学寮越菅吉、即河野、へ面会、夜深

二及

安政三年一月十四日 晩前医学寮仙台書生太田盛応接、及二更

安政三年一月二五日 其末、於好生館石州浜田書生、及二更而帰

安政三年八月十三日 医学寮文会

安政三年十月二五日 於医学寮浜田書生

安政三年十二月十六日 於医学寮会津之南戸三郎・今治池田彦三郎面

会

安政四年一月二〇日 御格式日御成、雨天也、若殿様御矢付之雁十

羽、文武芸師範御火術方、蘭菊(学力・筆者

註)・医学寮迄賜ル<sup>85)</sup>

安政三(一八五六)年一月二五日条では初めて「好生館」と言う名称が

登場していることに注目したい。佐賀藩では安政五(一八五八)年一二月に医学寮が片田江に移転した際に好生館と呼ばれるようになったと言われているが、近年の研究で天保期から好生館と呼ばれていたことがわかって<sup>86)</sup>いる。好生館の由来は中国の古典「書経」の一節「好生の徳は民心に洽し」で「人の生命を大切にする徳を万人にゆきわたらせる」という意味である<sup>87)</sup>と言う。草場珮川はこの一ヶ所のみ好生館という名称を使用しているが、安政三(一八五六)年一月時点で好生館と呼んでいることは安政五(一八五八)年の片田江移転前に既に医学寮が好生館という名称で呼ばれていたという裏付けになる。青木歳幸氏は天保年間から医学寮が好生館と呼ばれ漢詩文研究のサロンのような役割を果たしていたと指摘しているが『珮川日記』を見ても医学寮が応接や文会に度々使用され、実際に文化的役割も果たしていたことが了解される。安政四(一八五七)年一月二〇日条では毎月二〇日の式日に若殿である鍋島直大から医学寮・蘭学寮ともに御矢付の雁を賜っている。

時期こそ不明であるが医学寮が弘道館から八幡小路南一四番に移転していたことが推察されるもう一つの根拠として『屋鋪御帳扣』の同地所の記述をあげたい。

## 【史料一五】

(前略) 右元医学寮隼人組大石良英江被為拜領候二付、安政五年十二月、新沽券状当主江渡ル<sup>88)</sup>

医学寮が安政五(一八五八)年に片田江に移転したことによって空いた

医学寮の跡地を功績のあった大石良英が安政五（一八五八）年一二月に拝領したということであろう。つまりいつからという時期を示す明確な史料は管見では見いだせないが、天保五（一八三四）年創設のかつての医学寮の向い側である八幡小路南一四番に医学寮が移っていたことは確かである。

後に医学寮は安政五（一八五八）年一〇月、片田江へ移転する。<sup>55)</sup>『直正公譜』の記述を見てみると

#### 【史料一六】

一同（安政五年十月・筆者註）十四日、請役所分左之通相伺候処、其通被仰付、医師之儀大切之業柄ニ付、先年学寮被御取立、夫々御仕組相成、学館分心遣候様被仰付置候得共、当節別段役局被相建、医生之儀一般、猶又打部稽古仕候様被仰付方有御座間敷哉、於然ハ先以左之通被仰付方有御座間敷哉、奉伺候医学寮心遣、請役相談役中野兵右衛門、但、教導方大庭雪斎、大石良英被仰付其外略之、扱又先年医学寮被相建候節、好生館之額御染筆被下置候末ニ付、当節其通相唱候様被相建、且学寮之儀片田江へ被相建<sup>56)</sup>

とある。要約すると先年医学寮が建てられ弘道館の心遣いのもと運営されてきたが安政五（一八五八）年一〇月一四日に、教導方として大庭雪斎、大石良英を任命し、片田江へ好生館として新たに建てるということである。

ここまでみてきた医学寮の変遷を整理しておく、

① 文化六（一八〇九）年頃、古賀朝陽が牧仲禮らの推挙で八幡小路南

一四番にいわゆる私立の医学校、賜金堂を創設、文政元（一八一八）年まで続いていたことは確実であり、朝陽が失脚する文政六（一八一三）年頃まで継続されていたと推測される。

② 天保五（一八三四）年、賜金堂の向い側である八幡小路北一七番に藩立医学寮が創設される。その土地は古賀朝陽が提供したと言われているが史料的には確認できない。

③ 天保一一（一八四〇）年六月、北御堀端に改築された弘道館に移設したと考えられる。

④ 嘉永四（一八五二）年、八幡小路南一四番、かつての古賀朝陽の私的医学校賜金堂跡に医学寮と蘭学寮が併設されたと言われる。医学寮については『相良知安翁懷旧譚』の記述があるが蘭学寮については管見では一次史料は見当たらない。『屋鋪御帳扣』により安政五（一八五八）年、片田江に移転するまでの間、この場所に医学寮があったことは確かである。片田江移転前に既に好生館と呼ばれていたことも確認できた。

⑤ 安政五（一八五八）年、片田江に移転。改めて名称が好生館となる。となるがまだ史料不足の感も否めず、更なる史料発掘に努めたい。

## 二 蘭学寮創設時期再考

蘭学寮創設については第一章で述べたように嘉永四（一八五二）年、佐賀城下八幡小路の元医学寮の向いに移転し復興された医学寮の中に併設する形で創設されたと研究史では言われている。これらの論拠は第一章で史料一二としてあげた『公伝』中の嘉永四（一八五二）年の部分の記述であ

る。

史料一二によると八幡小路の天保五（一八三四）年に出来た元医学校の向いに数寄に任せて建てられた古賀朝陽の旧宅（賜金堂）があり、それを武富圮南が借りて門人を教えていたが、これを買取り医学校として大石良英に本宅で医学を教授させ、塾舎を蘭学寮として大庭雪齋を教導、渋谷良次を指南役、永松玄洋、宮田魯齋を掛合とした、これが佐賀における蘭学校の始めであると言うことである。管見では蘭学寮創設を嘉永四（一八五二）年とした史料は右記『公伝』以外に見つけることができないが、この記述には創設の月日や寮頭が誰であったかの言及はない。一方、『公伝』には左のような記述も見える。

#### 【史料一七】

今や火術機械を彼より採用するの必要に迫られたりしが、長崎には築堡を為し、佐嘉には大砲を鑄、彈藥を製して、銃陣を練習する等、其研究には蘭学を起す必要あると、もに、其科学を誘ひ得るものは医師の外にはなかりしかば前に創めたる医学校を更に改善し并せて蘭学を創めんと欲したりし（後略<sup>57</sup>）

要約すると蘭学寮創設の目的は火術発展のためであり当時、蘭書を読めるのは医者が専らであったので以前創設した医学寮を改善し蘭学寮も合わせて創りたいと言うことである。

ここで蘭学寮創設に関してこれまで全く言及されてこなかった『旧藩学校調』の記述を見てみたい。この史料は明治一六（一八八三）年一二月に文部省が旧藩時代の学校制度について調査した際に佐賀県が弘道館に関する

情報を多岐にわたり調査し提出したものであるが、その中に「蘭学」という項目があるので左に引用する。

#### 【史料一八】

##### 一蘭学

右者天保十一年改築以来別局相建蘭学寮ト云、其後学館に移ル、年月不詳、安政元年七月洋学之儀ハ火術研究之筋ヲモ有之ニ付、火術方内ニ移転之處、文久元年八月、再、弘道館内ニ帰ル（以下略<sup>58</sup>）

ここには蘭学寮が天保一一（一八四〇）年の弘道館改築の際に弘道館の別局として創設されたということが明記されている。管見ではこれまでこの記述に関して誰も言及しておらず看過されてきている。設置場所に関して気になるのは「其後学館に移ル、年月不詳」と言う文言である。当初は弘道館以外の場所で蘭学教授が行われ、その後弘道館に移る形をとったと言うことか。いずれにしても蘭学寮が天保一一（一八四〇）年に創設されたことは確かであり、当初の設置場所は不明であるがしばらくして弘道館に移ったということであろう。「文久元年八月、再、弘道館内ニ帰ル」と続いており、天保期に弘道館内にあった蘭学寮が最終的に文久元年に弘道館に戻ってきたと書かれている。

一方、「はじめに」で述べたように管見では唯一生馬寛信氏が『旧藩学校調』と同じく天保一一（一八四〇）年、蘭学寮が建てられたと指摘しているがこちらも看過されてきた。生馬氏の典拠とする史料は『御記録』の左の記述である。

## 【史料一九】

天保十一年六月二十五日条

廿五日島本龍嘯学館より御用申来候ニ付罷出候処、草場左助より被相達候者当時蘭学寮被相建候ニ付、寮頭被仰付之段相達相成候ニ付、御請之義者御屋敷用人共江申聞候上ニ而御請可仕ニ而相達置候事<sup>60</sup>

天保一一（一八四〇）年六月二五日に島本龍嘯（良順）が学館から呼出を受け、この時建てられた蘭学寮の寮頭に命じられたという内容である。天保一一（一八四〇）年六月に蘭学寮が創設されたことが明確に記されている。島本良順は佐賀藩蘭学の先駆者と言われる人物である。この時、使者となったのは第一章でも登場した草場珮川（この時点では草場左（嗟）助・筆者註）で、呼び出された先は学館、つまり弘道館であった。それを鑑みると天保一一（一八四〇）年の蘭学寮は弘道館内に創設されたと考えるのが自然であるが史料一八の『旧藩学校調』中の「其後学館に移ル」の記述があるのでこの時点での設置場所については今後要検討としたい。佐賀県立博物館寄託金武良哲資料中の金武の「佐賀日記」には蘭学寮が嘉永四（一八五二）年以前に存在していたことを裏付ける記述がいくつかみられる。以下に時系列で紹介したい。まず、弘化元（一八四四）年の二月二〇日条である。

## 【史料二〇】

十二月廿日 前日雨降レ雖今日晴併シ寒冷、少将様学官御成座ニ於蘭学講習御上覧被遊、出人数六人、即島本、大石、満岡、坂本、高取、

吾<sup>61</sup>

藩主直正が学館で蘭学講習を見学し、その際の出席者は島本良順、大石良英、満岡、坂本、高取、金武であったということである。大石良英は天保一五（一八四四）年七月一三日、直正に一代侍として五人扶持で召し抱えられており、その約五ヶ月後の出来事である。前述の『旧藩学校調』に毎月二〇日は藩主が臨校して教授、助教授の講釈を聴いたとあるので、まさしく藩主鍋島直正の臨校の際のことであろう。この記述の時点で既に蘭学寮は弘道館の中にあつたわけで史料一八で言及された当初別な場所にあつた蘭学寮が弘道館に移った時期は弘化元（一八四四）年一二月以前であつたことがわかる。

久米邦武は『公伝』で安政二（一八五五）年、「五月二十三日自ら蘭学寮に臨みて学生の業を視られたりき。公の蘭学寮に臨むは是を始めとす」と書いているが、それより一一年も前、藩主直正は二九歳の時弘道館内で既に蘭学講習を見学していたことが判明する。更に「佐賀日記」の弘化四（一八四七）年には左の記述がある。

## 【史料二一】

弘化四丁未

五月十九日 蘭学頭取於学官（ママ）被申附

五月廿一日 大石へ書状、尚大石之御達書人江送、其御達之書面左

如

私儀蘭学頭取被仰置、執心之人々稽古方心遣罷在候處、今般御参勤御供被仰付、無程江府罷越候ニ付打追之心遣難相叶、依之右頭

取此節御断申上候、右ニ付而者跡人柄御撰挙ニも可相成哉等ニ付、此段御達仕候条、筋々宜敷御相達深重頼入存候 以上

未五月

大石良英

田中太郎左衛門殿

西牟田孫左衛門殿<sup>66</sup>

要約すると、蘭学頭取であった大石良英が藩主の参勤御供のため蘭学頭取を務めることができなくなり、代わりに金武良哲が学館で蘭学頭取を命じられたと言っていることである。ここでは寮頭ではなく蘭学頭取という言葉が使われており、蘭学寮という言葉も出てこない。しかし、史料一九と二一を考え合わせれば金武が任命されたのは蘭学寮の長であることは明白である。史料二二からは蘭学頭取に任命された金武の稽古人取り立ての様子が窺える。

### 【史料二二】

口達

永松蕙橘

右之人自格護ニ而蘭学為稽古江戸罷越居被申条、当三月遊学被仰付候ニ付而者、自余見合御係より御助力被指出様其筋被相達度致御達候、以上

未 九月

山村良哲

西牟田孫左衛門殿

田中太郎左衛門殿<sup>66</sup>

弘化四（一八四七）年九月、当時は山村良哲という名前であった金武良哲が象先堂に私費で遊学した永松蕙橘に藩からの補助を願い出ている。宛先は田中太郎左衛門と西牟田孫左衛門である。この宛先は史料二一と同じで、西牟田と田中が蘭学寮に関わる役職者であったと考えられる。実際、田中太郎左衛門は当時弘道館の都検（教頭）であった<sup>67</sup>。西牟田孫左衛門は天保一二（一八四一）には献米方であったが<sup>68</sup>この時期の役職は未だ確認できていない。

象先堂門人姓名録には弘化二（一八四五）年九月一五日に佐賀藩の上村周聘が記載されており、二人において永松蕙橘の名前があり、上村が入門した同時期に永松も入門していることがわかる。金武の口達の文言から、弘化二（一八四五）年に入門した際は自費遊学であったが二年後の弘化四（一八四七）年になって藩から遊学を命じられるに至り、遊学費の補助を金武が願出でていることが了解される。永松蕙橘は永松玄洋の別名で弘化二（一八四五）年の時点では一五歳、藩に一代医家として召し抱えられ五人扶持を賜っており、後年好生館指南役差次となる<sup>70</sup>。東京大学医学部等で活躍する永松東海はその養子である<sup>71</sup>。

他方、佐賀県立図書館蔵鍋島文庫『褒賞録（弘化三年）』の嘉永元（一八四八）年の項には左の記述がある。

### 【史料二三】

（嘉永元年）

山村武左衛門弟

山村良哲

其方儀医業心懸出精療養方手広相整向い、御用可相立志二付、向後年

始御目見江被仰付候

銀五枚

一類

古賀大助

其方一類山村武左衛門弟良哲儀蘭学執心段々熟達、当時蘭学寮心遣をも被仰付置、地行医業方手広病用之間透を以稽古人取立等深切差引相整、別而骨折候付目録之通被為拝領候<sup>㉗</sup>

前半は山村武左衛門弟である山村（金武）良哲が医業出精のため今後正月に藩主御目見えを命じられたという記述である。後半部は古賀大助に一類である山村良哲が蘭学に熟達し蘭学寮心遣も命じられ兼々医業の合間に稽古人取り立てなど親切に行っているので銀五枚を与えるということが書かれている。つまり、嘉永元（一八四八）年の時点で山村（金武）良哲が蘭学寮心遣であったことがわかり蘭学寮は存続していたと言える。

この「稽古人取立等深切差引相整、別而骨折候」という記載は前述史料二二などのことであろう。その後も金武は稽古人取り立てを真摯に行っていたと見え、嘉永二（一八四九）年に緒方洪庵の適塾へ遊学を命じられた坂本徳之助に藩からの助力を願っている。左記史料二四を確認してみよう。

## 【史料二四】

嘉永二年酉

今四月 坂本徳之助遊学被仰付様願出吾差出申候

口達

坂本徳之助

右之人蘭学年來執心厚数ケ年私方相詰被申別而出精有之處より格別昇達相成候二付、猶又為研究去春より五か年之間大坂緒方洪庵江遊学願之通り差免、為御助力年々金五両宛被差出難有仕合奉存候、惣而同人当時高名之人二而諸国より数拾人之遊学生有之、別而繁盛之由二而、日課会業五等二相立居候趣ニ御座候処徳之助儀者差付より二等之会業ニ相加、猶又夜向共出精ニ付不遠上等ニモ相進可申趣ニ而、向後屹度御用達之人ニ御座候、然処、地行小身困窮之由場所柄と申御家元仕届者勿論、諸国之人相集ニ而何かと不少入費有之、実ニ難澁之由ニ而、年限中詰続出来不申趣、去迎微力之私手助等之儀も不相住、甚以残念千万之儀ニ付近此御達難申上御座候共別段彼是之次第被仰聞詰何卒年限中遊学被仰付被下候道者有御座間敷哉、奉願候於然者御蔭ニ熟達本人志願も相届、私も難有仕合奉存候条、当時之御年二者御座候得其格段之御評議ヲ以為御勤願之通被仰付被下候様、筋々宜敷御相達被下度深重願入存候

酉閏四月

山村良哲

西牟田孫左衛門殿

横尾文吾殿<sup>㉘</sup>

緒方洪庵の適塾へ遊学中の坂本徳之助が経済的に非常に困窮しているが成績も上がってきており、将来役立つ人材でもあるので遊学が続けられるよう（金銭的）補助をお願いしたいという内容である。宛先は史料二一、二二で登場した西牟田孫左衛門と、弘道館都検であった田中太郎左衛門に

代わって横尾文吾である。横尾文吾は時期ははっきりしないが『公伝』によるとやはり弘道館の都検を務めていたことがあり、<sup>(24)</sup> どちらも弘道館の事務方の長に差し込まれたものであると考えられ、山村(金武)良哲が弘化元(一八四四)年一二月から少なくとも嘉永二(一八四九)年四月までの間、弘道館内の蘭学寮心遣を務めていることからその期間、蘭学寮が存続していたことは間違いない。

以上の史料から判明したことを左に要約する。

① 天保一一(一八四〇)年六月に蘭学寮が創設され(当初の設置場所は不明)、遅くとも弘化元(一八四四)年一二月以前に弘道館に移った。創設時、島本龍嘯(良順)がその初代寮頭に命じられ、その際の使者は弘道館教諭草場磋助(珮川)であった。

② 弘化元(一八四四)年一二月、藩主鍋島直正が弘道館にて蘭学講習を上覧。その際の出席者は島本良順、大石良英、山村(金武)良哲、坂本徳之助、満岡、高取であった。

③ 弘化四(一八四七)年五月、山村(金武)良哲が大石良英に代り蘭学頭取を命じられた。九月に象先堂遊学生永松蕙橘に対する補助を願っている。

④ 嘉永元(一八四八)年時点で医業出精のため山村(金武)良哲が今後御目見えを命じられた。山村(金武)が蘭学寮心遣を務め、兼々医業、稽古人取立を真摯に行ったことにより一類である古賀大助が銀五枚拝領している。

⑤ 嘉永二(一八四九)年四月、山村(金武)良哲は適塾遊学生坂本徳之助に遊学費の補助を願っており、その時点でも蘭学寮役職者であったことがわかるので同じく蘭学寮も継続していたことが了解さ

れる。

この五点を考え合わせると、天保一一(一八四〇)年六月に蘭学寮が創設されており、島本良順、大石良英、山村(金武)良哲らがその長を務め、少なくとも嘉永二(一八四九)年までは継続していたことが言える。蘭学寮は当初は弘道館以外の場所にあったが遅くとも弘化元(一八四四)年一二月までには弘道館に移された。これらの事実から嘉永四(一八五二)年に医学寮の中に蘭学寮が創設されたという通説は訂正されるべきであろう。

### 三 蘭学寮創設と天保の改革

蘭学寮の創設が嘉永四(一八五二)年ではなく天保一一(一八四〇)年であり、当初、別な場所に設置されたにしろ遅くとも弘化元(一八四四)年一二月までには改築された新しい弘道館の中に移転したことの意義を考えたい。

一〇代藩主鍋島直正は天保元(一八三〇)年に藩主を引き継ぐが、直正が幼い頃の側頭で、襲封後は年寄相談役筆頭となったのが古賀穀堂であった。<sup>(25)</sup> これまでの研究史では藩儒でありながら開明的思想の持ち主である古賀穀堂が侍講となり、若き直正に強い影響を与えたとされる場合がほとんどであるが、最新の研究では伊藤昭弘氏が朱子学者である古賀穀堂に師事した直正が自己研鑽し徳を積み人々の模範となり正しい政治を行う「修己治人」を政治の根本としていたと指摘している。<sup>(26)</sup> 古賀穀堂の開明的思想とそこから導き出された直正の西洋志向、いわゆる蘭癖が強調される従来の研究史において新たな側面を見せる指摘と言えよう。本稿では直正の政治

指針について紙数を割けないが従来の研究史に加えて伊藤氏の最新の研究を加えつつ簡略に当時の政治情勢を振り返ってみたい。

襲封当時直正は一七歳と若輩で、隠居後も父の周辺を固めていた門閥層の家臣たちが実質的な藩政の主導者であった。天保六（一八三五）年五月一日の佐賀城二ノ丸焼失をきっかけに直正は主に改革派の家臣たちとともに藩政改革に乗り出し、焼失の翌月には藩政府の要人の多くは更迭、罷免され、直正の庶兄である鍋島安房、井内伝衛門、中村彦之充が藩政の中樞に乗り出す<sup>77</sup>。伊藤氏はこの時、任を解かれた成富十右衛門ら守旧派要人たちは役職が差次であり、本役が解職されたとの記述はないと指摘、二ノ丸火災後も門閥層は依然として藩政の中樞に残っており人事面で劇的变化は生じておらず、むしろ火災以前の体制を強化したとの評価を与えている<sup>78</sup>。そういった側面はありつつも直正の側近であった古賀穀堂、牟田口藤右衛門、永山十兵衛らが藩校弘道館の重職を占めたことは事実である。伊藤氏も二ノ丸焼失の際の新人事に関して「注目すべきは、側近か門閥かという対立構造ではなく、前述の井内をはじめ、弘道館の教官を務めたり、朱子学者古賀精里・穀堂のもとで学んだ者が多く登用された点である」と述べている<sup>79</sup>。古賀穀堂は天保七（一八三六）年に亡くなるが、穀堂亡きあとも穀堂やその父古賀精里に育てられた人材が御仕組所に多く配置されたと伊藤氏は指摘する<sup>80</sup>。

天保一一（一八四〇）年には学館経費が増額され弘道館も改築された。その面積はこれまでの約三倍となり、武芸場、馬責馬場なども設けられ文武両道の殿堂となった<sup>81</sup>。新しく生まれ変わった弘道館は直正と穀堂、改革派の重臣たちが一丸となって推進してきた学問と人材登用を重視する天保の改革の結晶と言えよう。生馬寛信氏は佐賀藩の天保期における学政の組

織化について「学政改革を藩政改革の一環に位置づけ、明確な目的意識のもとで、公的に学校を制度化したこと、学校が根本学校としての官学校だけでなく、医学、外国語、理化学、工業、軍事の面まで多角的に設立され、しかもそれらが系統的・有機的に結合していた（後略）」と述べている。蘭学寮の創設時期が天保一一（一八四〇）年であったことの意味はまさにここにある。古賀穀堂が『学政管見』で「近來蘭学大ニ啓ケテ、ソノ学フトコロハ、曾テ和蘭陀ノ学問ト云事アラス、世界一統ノ事ヲキワメシル事ナリ<sup>82</sup>」とその有用性を説いた蘭学の学校が弘道館を拡大・整備する中で創設されたことは佐賀藩天保改革の所産の一つであると言えよう。

最後に古賀穀堂が『学政管見』と『濟急封事』で学問奨励とともに重きを置いていた人材登用に関する史料をあげる。藩主直正と請役鍋島安房の指示を諸役に達することを書き記した史料の天保十二（一八四一）年六月一三日条に左の文面がある。

#### 【史料二五】

諸役其外人柄御選挙之儀差定候扱無之、一体弘道館之儀斯之通御改築御家中御取立相成儀候処、偶ニは左迄文武之心懸無之人をも御撰立有之候通ともニては彼是不致一貫、御趣意難相立ニ付、いつれ弘道館之義を御撰挙之基本ニ被相立置、已來諸役は勿論御使者其外一切御用向被仰付候節は、文武志厚之人ノ御撰挙相成候様之事<sup>83</sup>

要約すると諸役は人柄で選ぶことになったが、時々そこまで文武の心がけがない人が選ばれる場合もあり一貫性がない、弘道館の例を人を選ぶ場合の基本とし、諸役は勿論、使者その他全て文武の志が厚い人を選ぶよう

にということである。

史料二一でみたように金武良哲が大石良英に代わり蘭学頭取を命じられているが、なぜこの時選ばれたのが金武良哲であったのかということを考えてみたい。金武は職人出身と言われる蘭方医であった。<sup>85</sup> 島本良順の元で修業し天保一〇（一八三九）年には江戸へ遊学、象先堂で伊東玄朴の代診や会読などの蘭学修業を熱心に行っている。天保一二（一八四一）年一月に帰藩し、佐賀城下中町で開業していたが弘化初期には請役で弘道館頭人であった請役鍋島安房に見出され家来となった。金武の蘭学に対する志の厚さと象先堂で伊東玄朴の代診を任されたほどの力量を見込んで請役鍋島安房は自身の家来に取り立て、ついには大石良英に代わり蘭学頭取に任じたと考えられよう。一方で金武の力量とは別に彼の出自や蘭学に対する真摯な態度が人選の要となったのではないか。藩首脳部、弘道館中枢部が行おうとしていた人材登用策を具現化し、より広くその施策を知らしめるためには職人出身で蘭学に執心な金武の登用が身分は低くとも学問に精進すれば重い役も任されることを表わす格好の事例であると当時の為政者たちが考えたのではなからうかと筆者は推察する。

### おわりに

今回、島本良順を頭取として天保一一（一八四〇）年に蘭学寮が創設されたという従来看過されてきた生馬寛信氏の指摘を金武良哲の「佐賀日記」、『褒賞録』や『御記録』などの史料から、また『直正公譜』、『直正公年譜地取』、『旧藩学校調』という基本史料を精査する中で裏付けることができた。その後、寮頭が大石良英、金武良哲と続くことも新しい知見であ

る。医学寮の変遷についてもある程度明らかにすることができたと考える。

『公伝』については筆者も時に応じて使用し便宜に預かっているが、伊藤昭弘氏は久米邦武に敬意を表しつつも「『公伝』は史料ではなく、あくまで久米邦武という研究者の著書にすぎない」と述べている。<sup>86</sup> 編纂物であるという『公伝』の資料的性格を把握し、書かれたことを典拠とする場合はその一次史料を独自に確認して使用する姿勢が必要となろう。

近世社会において学校を創設するということは今日の経営的かつ商業的な意味も併せ持つ学校建設とは意味合いが違っていた。当時の教育という概念には真の意味で人を創り上げるといふ理念があったと筆者は考えている。通説どおり嘉永四（一八五二）年に初めて蘭学寮が医学寮に併設される形で創設され、その理由が史料一七にあるように火術発展がその目的で、蘭書を読めるのは医者と言うことで医学寮の中に蘭学寮を建てたのであれば、蘭学寮は実用のために蘭書を読みこなす一種の職人を育てる一役局に過ぎなくなる。安政元（一八五四）年、火術方に蘭学寮を併設したのもそれは最早、真の意味での学校ではなく、語弊を恐れずに言えばいわゆる実用重視の専門機関になったということではないか。今回検証したとおり天保一一（一八四〇）年に学問の殿堂として大規模に改築された弘道館とともに創設されたのであれば蘭学寮は真の意味での学校であったと筆者は捉えたい。学校とは古賀毅堂も「忽テ学問ノ枢要ナルトコロハ、芸術（技術）ノ上ニアラス」と述べているように実益のためだけに技術を教える場ではないと考える。

今回、蘭学寮、医学寮の創設と変遷について従来の通説に再検討を加えたがそこから見えてきたのは一度創設されたものが当初の理想と学習内

容、規模を保って継続していくことは非常に難しかったということである。時代の流れや為政者の考えなどによって休止したり、場所を変えて再興されたり、管轄が変わったりと言うことが度々起こり、創設時期や推移が不明瞭となり、本稿でも詳細が明らかとなつたとは言い難い。そこで教授された学問の中身についても史料的制約がありほとんど明らかとなっていない。筆者の今後の検討課題としたい。

蘭学寮創設時期の再検討により、蘭学という新しい学問、その教育機関である蘭学寮が天保改革に果たした象徴的役割、藩主や藩の中核、藩校の執行部、そして蘭学者たちに与えた新しい希望のようなものを改めて評価できたと考える。

### 〈註〉

- (1) 杉本勲編『近代西洋文明との出会い』—黎明期の西南雄藩 思文閣出版 一九八九年一〇月 九頁
- (2) 中野正裕「幕末佐賀藩科学技術系役局の変遷」『幕末佐賀藩の科学技術』編集委員会『幕末佐賀藩の科学技術 下 洋学摂取と科学技術の発展』岩田書院 二〇一六年二月
- (3) 中野禮四郎編『鍋島直正公伝第三編』一九二〇年(四八四頁)、酒井シヅ「佐賀藩の医学」『近代西洋文明との出会い—黎明期の西南諸藩』思文閣出版一九八九年(二五三頁)、鍵山栄「佐賀医療百年」佐賀県医師会 一九七九年一月(八〇頁)、西村謙三「佐賀県教育五十年史上編」佐賀県教育会 一九二七年五月(二二二頁)等で嘉永四年創設とされている。
- (4) 生馬寛信「白石鍋島記録にみる幕末期佐賀藩の教育」『地域文化研究(1)』佐賀大学地域文化総合研究会 一九八七年三月 四五頁
- (5) 久米邦武は天保一〇(一八三九)年生まれで一〇代藩主鍋島直正に近侍、文久三(一八六三)年には藩校弘道館で教鞭を取っている。明治以降は修史局編修官となり東京大学の国史学教授も務めた歴史学者である。『鍋島直正公伝』に解説を執筆した城島正祥氏は「元治元年直正の御側に仕えて以来その知遇に浴し、もつともよく直正の人柄を知ると共にそのすぐれた識見を理解した博士が、自ら体験し見分した事実と博搜した文書・記録を照合し、幕末・維新史についての広い視野の下に鋭い洞察を加えている」としながらも「史料の明示が省かれていること」や記述に関しての誤りも見受けられることを指摘している。
- (6) 伊藤昭弘編『古文書に見る鍋島直正の藩政改革(二)』佐賀大学地域学歴史文化研究センター 二〇一八年 六頁
- (7) 生馬寛信「幕末期・佐賀藩弘道館教官の登用問題」幕末維新学校研究会編『幕末維新期における「学校」の組織化』一九九六年二月 四六七頁
- (8) 拙稿「伊東玄村とシーボルト事件」『洋学26』二〇一九年四月 四二頁
- (9) 金武良哲の日記については拙著「佐賀藩蘭学者金武良哲の知識形成に関する史料学的研究」二〇一四年三月 に詳しい。
- (10) 古賀穀堂が「学政管見」で医学校を提言した際には「学館(弘道館・筆者註)ノ内ニ医学館を持たニシテソノ稽古寮ヲ立、上手ノ医者ニ命セラレテ医学寮ノ教授トシテ(後略)」とあり、医学館は弘道館内で学問を学ぶところ、医学寮は実技を稽古するところとして分けて考えていたようだが、実際に医学校が創設されてからはそのような区別はなく、それぞれの場合において医学館、医学寮と呼ばれていたようである。白石家の記録を見ても天保五(一八三四)年一月には医学館と記載され、翌天保六(一八三五)年二月には医学寮とあり、それ以降も医学寮となっている。『鍋島直正公伝』では主に医学館と表記されているが医学寮と表記されている場合も見られる。『草場珮川日記』では一貫して医学寮と記載されているが、その子草場船山は医学館と日記に書いている。一方、『相良知安翁懐旧譚』では医学館と呼ばれておりそこから鑑みると天保五(一八三四)年に創設された当初は医学館と呼ばれておりその後比較的早い段階で医学寮と呼ばれるようになったと推測されるため本稿では医学寮で統一した。
- (11) 『佐賀県近世史料 第八編第四巻』佐賀県立図書館 二〇一三年三月 一三頁
- (12) 前掲『佐賀県近世史料 第八編第四巻』一〇五頁
- (13) 『相良知安翁懐旧譚』『医海時報第五百一号』一九〇四年一月 七〇頁  
[http://sagarachian.jp/site\\_files/file/kaiyutan2.pdf](http://sagarachian.jp/site_files/file/kaiyutan2.pdf)
- (14) 佐賀医学史研究会編『佐賀医人伝』佐賀新聞社 二〇一八年一〇月 九九頁
- (15) 前掲『相良知安翁懐旧譚』七〇頁

- (16) 『明和八年・佐賀城下屋鋪御帳扣』財団法人鍋島報効会 二〇一二年 二七頁
- (17) 木崎愛吉『頼山陽全書 全伝上巻』頼山陽先生遺蹟顕彰会 一九三一年二月 四四九頁
- (18) 中野禮四郎編『鍋島直正公伝第二編』一九二〇年八月 一四一〜一四二頁
- (19) 前掲『明和八年・佐賀城下屋鋪御帳扣』三四頁
- (20) 前掲『相良知安翁懷旧譚』七〇頁
- (21) 『佐賀県近世史料 第一編第十一卷』佐賀県立図書館 二〇〇三年三月 四七〇〜四七一頁
- (22) 註(13) 参照
- (23) 前掲『鍋島直正公伝第二編』一四四頁
- (24) 前掲『佐賀県近世史料 第八編第四卷』六五四頁
- (25) 前掲『鍋島直正公伝第二編』一一六〜一一七頁
- (26) 伊東栄『伊東玄朴伝』玄文社 一九一六年 伊東玄朴年譜四五頁
- (27) 三好不二雄監修、三好嘉子校註・解題『草場珮川日記 下巻』財団法人西日本文化協会 一九八〇年三月 五二二頁
- (28) 前掲『佐賀県近世史料 第一編第十一卷』四三三頁
- (29) 鍵山栄『佐賀の蘭学者たち』佐賀新聞社 一八七六年一月 八一頁
- (30) 前掲『幕末佐賀藩科学技術系役局の変遷』一五〇頁
- (31) 前掲『佐賀県近世史料 第一編第十一卷』五六四頁
- (32) 前掲『佐賀県近世史料 第一編第十一卷』八七頁
- (33) 荒木見悟監修、三好嘉子校註『草場船山日記』文献出版 一九九七年一〇月 五頁
- (34) 前掲『草場珮川日記 下巻』珮川日記年表 九頁
- (35) 前掲『草場船山日記』六九二頁
- (36) 前掲『草場珮川日記 下巻』五一九頁
- (37) 前掲『草場船山日記』六頁
- (38) 前掲『草場船山日記』七頁
- (39) 前掲『草場船山日記』七八頁
- (40) 註(19) 参照
- (41) 前掲『伊東玄朴伝』伊東玄朴年譜 四八頁
- (42) 青木歳幸『佐賀藩における西洋医学の受容と展開』『幕末佐賀藩の科学技術 下巻』二〇一五年三月 三八頁
- (43) 洋学撰取と科学技術の発展』岩田書院 二〇一六年二月 六〇頁
- (44) 前掲『佐賀藩における西洋医学の受容と展開』六〇頁
- (45) 前掲『佐賀藩における西洋医学の受容と展開』六一頁
- (46) 前掲『鍋島直正公伝第三編』四八四頁
- (47) 前掲『相良知安翁懷旧譚』十八頁
- (48) 前掲『草場珮川日記 下巻』五五八頁
- (49) 前掲『草場珮川日記 下巻』五六二、六〇一、六〇二、六一八、六二四、六二七、六三〇頁
- (50) 前掲『佐賀の蘭学者たち』八二頁
- (51) 青木歳幸『好生の徳と好生館の創始』『好生館180年記念誌』佐賀県立医療センター好生館 二〇一七年一〇月 六一頁
- (52) 前掲『好生の徳と好生館の創始』六一頁
- (53) 前掲『好生の徳と好生館の創始』六一頁
- (54) 前掲『明和八年・佐賀城下屋鋪御帳扣』二七頁
- (55) 青木歳幸『佐賀藩の医学』佐賀大学地域学歴史文化研究センター 二〇一九年三月 六七〜六八頁
- (56) 前掲『佐賀県近世史料 第一編第十一卷』二五九〜二六〇頁
- (57) 前掲『鍋島直正公伝第三編』四八二頁
- (58) 『旧藩学校調 一・二』S複鍋062511 二頁
- (59) 前掲『旧藩学校調 一・二』四六頁
- (60) 佐賀県立図書館蔵鍋島文庫(天保年中) 御記録 S複鍋022 214103
- (61) 佐賀県立博物館寄託「金武良哲資料」
- (62) 佐賀県立図書館蔵鍋島文庫(天保年中) 御記録 S複鍋022 214104
- (63) 前掲『旧藩学校調 一・二』四八頁
- (64) 中野禮四郎編『鍋島直正公伝第四編』一九二〇年八月 二五二頁
- (65) 前掲『金武良哲資料』
- (66) 前掲『金武良哲資料』
- (67) 前掲『草場珮川日記 下巻』四九八頁
- (68) 伊藤昭弘『古文書に見る鍋島直正の藩政改革』佐賀大学地域学歴史文化研究センター 二〇一五年三月 三八頁

- (69) 前掲『伊東玄朴伝』 門人姓名録 五頁
- (70) 佐賀医学史研究会編『佐賀医人伝』佐賀新聞社 二〇一八年 一七九頁
- (71) 前掲『佐賀医人伝』 一八〇～一八一頁
- (72) 佐賀県立図書館蔵鍋島文庫『褒賞録(弘化三年)』 S 複製2551020
- (73) 前掲「金武良哲資料」
- (74) 前掲『鍋島直正公伝第四編』 三六七頁
- (75) 前掲『佐賀医人伝』 九七～九八頁
- (76) 伊藤昭弘『青年藩主鍋島直正―天保期の佐賀藩』佐賀大学地域学歴史文化研究ゼンター 二〇二〇年三月 三一頁
- (77) 生馬寛信「佐賀藩における天保～明治初年の学政改革」長野暹編『西南諸藩と廃藩置県』九州大学出版会 一九九七年二月 一五二頁
- (78) 前掲『青年藩主鍋島直正―天保期の佐賀藩』 四三～四四頁
- (79) 前掲『青年藩主鍋島直正―天保期の佐賀藩』 四四頁
- (80) 前掲『青年藩主鍋島直正―天保期の佐賀藩』 四五頁
- (81) 生馬寛信「維新前夜・佐賀藩の学校改革」前掲『幕末維新时期における「学校」の組織化』 三四～三五頁
- (82) 前掲「維新前夜・佐賀藩の学校改革」 三四一～三四二頁
- (83) 前掲『佐賀県近世史料 第八編第四卷』 一〇三頁
- (84) 前掲『古文書に見る鍋島直正の藩政改革』 三〇頁
- (85) 金武良哲については拙稿「近世後期佐賀藩蘭学者「金武良哲資料」の史料学的研究」『史学研究集録 第42号』国學院大學大学院史学専攻大学院会 二〇一八年三月に詳しい。
- (86) 前掲『青年藩主鍋島直正―天保期の佐賀藩』 一五頁
- (87) 前掲『鍋島直正公伝第三編』 一六九～一七〇頁